

地域における世代間交流活動への参加が教師・
保育者を目指す学生の認識に及ぼす影響 その2
－活動後の振り返りの効果に着目して－

岸 本 美 紀
権 　 　 泷 珠
石 川 博 章
小 原 倫 子
水 野 恭 子

研究紀要第54号 抜粋

岡崎女子大学
岡崎女子短期大学

令和3年3月15日発行

地域における世代間交流活動への参加が教師・保育者をめざす学生の認識に及ぼす影響 その2

—活動後の振り返りの効果に着目して—

岸本 美紀* 権 洵珠* 石川 博章* 小原 倫子* 水野 恭子*

要 旨

本学では学生が中心となり「笑話浪漫サロン」を企画・実施してきた。「笑話浪漫サロン」に参加した学生に対して、社会貢献に対する意識や「笑話浪漫サロン」に参加した感想などを問う質問紙調査を事前・当日・事後の合計3回実施した。その結果を比較することで、新たに行った「笑話浪漫サロン」後の振り返りの効果について把握を試みた。学生の回答結果から、活動後の振り返りによって社会的責任などの意識が高まる可能性が示唆された。

キーワード：地域、世代間交流活動、活動後の振り返り、質問紙調査

I. 研究の背景

1. 研究の背景と目的

少子高齢化の進行に歯止めがかからない昨今である^{注(1)}。同時に進んでいる家族の変容は、単身世帯の増加と家族の小規模化を浮き彫りにさせている。家庭、地域という日常生活領域におけるつながりや支え合いの低下による様々な問題が顕在化してきている。「孤食」「孤立死」「孤育て」「引きこもり」「8050問題」といった問題が子どもから高齢者、子育てする親、若者や壮年層を巻き込み、人の生きる社会のあり方への本質的な問いかけとして、世代を超えた課題となってきた。

保育や福祉分野においても子どもから高齢者まで地域に住んでいる人々が安心して暮らせるコミュニティづくりへの関心が高まっている。教師・保育者養成を使命とする本学においても、保育所保育指針等に明記されている保育上の意義を踏まえ(尾崎：2017)¹⁾、地域とつながる養成教育の取り組みとして、学生主体による世代間交流活動(「笑話浪漫サロン」)を行っている。世代間交流とは、「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」とされる(藤原：2013)²⁾。人間の生の営みにおいて世代間のつながりは、生物的個体としての存続のた

めに欠かせないものとして自然に形成されてきたが、産業社会において経済的な必要性の減少によりしだいに弱体化してきた。その後、意図的、意識的な取り組みとして1960年代から世代間交流が活動として始まるようになり(金森：2012)³⁾、とりわけ近年においては、人口減少社会における地域社会の人間関係の修復や社会の持続可能性を探る手がかりの一つとして注目されている。

本研究では、教師や保育者をめざす本学の学生が主体となって行った世代間交流活動の意義や効果を分析した研究(権他：2018)⁴⁾を踏まえ、世代間交流活動に参加する前後において学生にどのような認識の変化がみられるのかを分析する。特に、地域社会とのつながりの構築や市民性の認識にどのように関係しているのかについて、社会的な責任感の概念を援用して調査分析し、考察することとする。

2. 世代間交流に関する先行研究

世代間交流に関する研究は、子どもや若者との交流が高齢者にもたらす効果に関連するものが多い。世代間交流が高齢者の主観的健康感や生きがい感を高め、QOLが向上し、ジェネラティビティ(Generativity、世代継承性)の増加をもたらすといった、ポジティブな効果や影響が数多く報告されている(田淵他：2014、黒岩：2018、崔：2019)^{5) 6) 7)}。

*岡崎女子大学

高齢者が若者や子どもとの交流を通して、次世代に向けた価値や文化をつなぎ、子どもの健やかな成長の喜びを地域の全世代が共有できる実現を目指すうえで、単なる場づくりを超えて、異なる世代間での相互作用の活性化を促す仲介者の役割が重要であるという点が示唆されている。

保育と世代間交流活動の視点からの実践や研究も注目されている。地域コミュニティの弱体化や家族の小規模化等の要因から、児童と多様な世代が交流し、豊かな経験を育んでいく機会が少なくなっているなか、2017年に改訂（改定）された「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では、園内の保育にとどまるのではなく地域と密接に連携、協働する保育の重要性が明記された⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。幼児の人間関係を育むために、家庭を核として地域の人たちとふれあうことで身近な人間関係を広げ地域社会に親しみを持てるように、保育の場においても幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫することが求められている。徳田他（2020）による幼稚園の保護者と保育者の捉える高齢者との世代間交流の意義や効果に関する研究では、保護者は子どもの知育と徳育に有効な取り組みとして、また、保育者は高齢者への優しさ等の徳育に関し世代間交流の意義を認識しており、幼児教育における世代間交流のポジティブ効果に注目している¹¹⁾。實川他（2019）は、千葉市の保育現場を対象とした実態調査を通して、地域連携事業を活発に行う上では、基盤となる地域住民との関係づくりが必要であり、地域連携事業のなかでも世代間交流活動は開催頻度が高く、満足度の高い地域交流活動となっているとした¹²⁾。また、吉津他（2017）は、子どもと高齢者の世代間交流を、生活様式の価値・規範と存在の肯定感を授受する互惠関係と言及している¹³⁾。このように、保育、幼児教育においても世代間交流の意義に関心が広がっている。

高等教育における世代間交流活動の意義に関する実践的な研究報告も増えている。矢野ら（2016）は、保育者養成教育において「造形」を取り入れた世代間交流の意義について¹⁴⁾、加藤他（2015）は「ふれあい給食」を活用した世代間交流と栄養士教育の効果について¹⁵⁾、芝田（2019）は、保育士養成大学の教職実践演習の時間を活かした世代間交流の取り組みの意義について¹⁶⁾、一原他（2018）は、看護学生の

AED 教室など特性を生かした世代間交流プログラムについて¹⁷⁾報告しており、各大学の専門性や特性を活かしつつ世代間交流を進めて行くことに、教育的な効果が期待できることが示唆されている。

世代間交流のみならず、広くボランティア活動への参加がもたらす教育的な効果についても数多くの報告がある。伊多波他（2016）は「奉仕ボランティア志向が効力感や協調性に影響を与えている」¹⁸⁾とし、荒井他（2017）はボランティア活動への参加成果志向要因分析とボランティア教育の実効性高揚の方策について¹⁹⁾、溝部他（2014）は、学校支援ボランティア活動の教育効果が担保される学修期間について²⁰⁾提言している。谷田（松崎）（2015）は、大学で学び獲得する学士力を構成する態度・志向性の一つである「市民としての社会的責任」尺度を開発、大学生に実証調査し、大学生が地域での責任をやや引き受けたいと思うものの、自分の力で地域生活を改善できると思っていないと報告している²¹⁾。本学の学生を対象とした研究では、世代間交流活動が自らのコミュニケーション能力が高まる機会、地域社会や人々への関心や視野が広がる機会、今後の保育の専門職としての視点の形成の機会としても有意義であることが確認できた。一方、大学の地域協働や地域貢献としての認識は不明確という結果も現れた（権他：2018）²²⁾。

3. 本学学生の世代間交流活動（「笑話浪漫サロン」）活動の経緯

地域の高齢者、子ども、若者が一緒にふれあい、異世代間の交流を深め、豊かな人間関係を築くきっかけづくりをねらいとした取り組みである。前身は平成21年度から当法人の短大生による「岡短昭和浪漫サロン」である。平成25年度からは、附属幼稚園の園児たちも一緒に参加し、幅広い世代間の交流会となった。平成27年度から子ども教育学部生が中心となって大学の地域貢献活動として開催し、平成28年度は、岡崎市市制100周年記念プロジェクトとして選定され、学内外で年6回開催した。平成29年度から31年度までに学内外を会場として年2-3回ペースで開催してきたが、今年度は新型コロナウイルスの影響で開催を見合わせている。実施体制として、学生実行委員会が中心となって企画運営を担い、実行委員以外の学生も当日のボランティアで参加する。複数名の教員が学科業務の一環として学生の活動をサポートしている。地域

との連携では、学区福祉委員会、民生児童委員会や老人クラブ、社会福祉専門機関や福祉施設との協力している。毎回の参加人数は、高齢者と子ども、学生を合わせて40～150名程度である。写真は、サロン活動の様子の一部である。



写真①幼児、大学生、高齢者による伝承遊び



写真②中高生、大学生、高齢者による制作活動

II. 研究方法

1. 対象

令和元年度「笑話浪漫サロン」11月23日(土)実施の第1回、令和2年2月18日(火)実施の第2回に参加した本学1～4年生、岡崎女子短期大学2年生。第1回、第2回の参加者の内訳は、表1、表2の通り。

表1 第1回「笑話浪漫サロン」参加者

	事前	当日	事後
1年生	9(20.9)	9(21.4)	5(22.7)
2年生	12(27.9)	12(28.6)	9(40.9)
3年生	4(9.3)	5(11.9)	3(13.6)
4年生	7(16.3)	6(14.3)	5(22.7)
幼～2年	11(25.6)	10(23.8)	0(0.0)
合計	43(100.0)	42(100.0)	22(100.0)

表2 第2回「笑話浪漫サロン」参加者

	事前	当日	事後
1年生	4(16.0)	4(16.0)	4(30.8)
2年生	12(48.0)	14(56.0)	2(15.4)
3年生	2(8.0)	0(0.0)	0(0.0)
4年生	7(28.0)	7(28.0)	7(53.8)
合計	25(100.0)	25(100.0)	13(100.0)

2. 調査方法

実施日の前に行われた学生実行委員会にて、「笑話浪漫サロン」当日参加者に対して質問紙調査を行った(以下、事前アンケート)。

「笑話浪漫サロン」当日、終了後に参加者に対して質問紙調査を行った(以下、当日アンケート)。

また、「笑話浪漫サロン」当日の翌週に設定した学生実行委員会にて、委員会参加者に対して質問紙調査を行った(以下、事後アンケート)。

3. 調査内容

(1) 事前アンケート

事前の質問内容は、主に「プロフィール」、「社会貢献についての意識」(自由記述)、「責任感尺度」等から構成されている。

学生の地域社会への責任感を把握するため、谷田(松崎)(2015)の「大学生の地域社会への責任感尺度」²³⁾12項目から11項目を抜粋し、使用した(以下、「責任感尺度」)。質問項目は5件法による回答であり、数値が低いほど社会貢献(地域貢献)について強く思っていることを示す。

(2) 当日・事後アンケート

当日・事後アンケートは、主に「プロフィール」「社会貢献についての意識」(自由記述)、「責任感尺度」、「事前の準備への関与」(5件法)、「参加しての感想」(以下、「感想」とする)等から構成されている。

「感想」の質問項目は5件法による回答であり、数値が低いほど強く思っていることを示す。

4. 分析方法

本研究では、(1)「社会貢献についての意識」(自由記述)以外の全項目について単純集計を行った。(2)「責任感尺度」(事前・当日・事後)、「感想」(当日と事後)については得点平均値を比較した。統計解析には、SPSS(Statistical Package for the Social Science)解

析ソフト (Version23)を使用した。

5. 倫理的配慮

質問紙調査については、令和元年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得て行った（通知番号 46）。また、調査趣旨に同意した回答者による無記名での回答である。

Ⅲ. 結果及び考察

調査結果の一部を抜粋して、以下に示す。

1. 第1回

(1) 事前アンケート

①分析対象

「笑話浪漫サロン」当日の数日前に実施された実行委員会に参加した43名（表1）。そのうち、実行委員17名(39.5%)、当日ボランティア26名(60.5%)。

②「笑話浪漫サロン」に対する思いや考え

事前に、第1回「笑話浪漫サロン」に参加するきっかけや、参加前の気持ちについて尋ねた。

a. 参加のきっかけ

「教職員に勧められたから」がきっかけで参加した学生が最も多かった（11名：37.9%）。その後、「以前から参加していたから」（9名：30.0%）、「友達や先輩に誘われたから」（4名：13.8%）、「世代間交流に興味があったから」（3名：10.8%）、「ボランティア活動に参加したかったから」（2名：6.9%）と続く。

学科行事として、参加するよう求めていたことが影響していたのではなかろうか。「以前から参加していたから」が2番目に多かった理由としては、「笑話浪漫サロン」はこの年で5年目となり、1年生から実行委員として活動している学生がいたことが考えられる。

b. 参加への気持ち

事前に「笑話浪漫サロン」に対する気持ちを尋ねたところ、「とても楽しみ」（4名、9.3%）、「まあまあ楽しみ」（18名、41.9%）、「どちらとも言えない」（21名、48.8%）という結果であった。ネガティブな思いを抱いている学生はいなかったが、楽しみにしている学生とどちらでもない学生の割合に差がみられなかった。

③社会貢献・ボランティアについて

本学の建学の精神である「社会貢献」やボランティア活動に関する考えなどを尋ねた。

a. 大学入学後のボランティア活動への参加

大学入学後のボランティア活動経験が「ある」学生は27名(64.3%)、「ない」学生は15名(35.7%)であった。総合大学に通う学生を対象に社会貢献・地域連携に対する意識を尋ねた羅他（2012）では、分析対象者の22.8%がボランティア活動への参加経験があった²⁴⁾。このことから、本学学生のボランティア活動経験率の高さがうかがえる。

b. 地域の活動や交流への関心

町内会活動など地域の活動や交流についての関心を尋ねた結果、関心が「ある」学生は18名(42.9%)、「どちらでもない」が20名(47.6%)、「ない」学生は4名(9.5%)という結果であった。地域との交流に関心をもっている学生は半数以下であった。

c. 地域の活動や交流への参加経験

実際に地域の活動や交流に参加した経験については、「ある」学生が19名(45.2%)、「ない」学生が23名(54.8%)であった。マイナビの大学生への調査(2016)によると、近所付き合いをした経験がある学生が134名(63.2%)、ない学生が78名(36.8%)という結果であった²⁵⁾。本学の学生は、4割以上が地域との活動や交流を経験しているが、「笑話浪漫サロン」に継続参加している実行委員の存在が影響していると推察する。

d. 「社会貢献」活動への参加

今までに「社会貢献」のための活動をしたかどうか尋ねた。当日・事後アンケートの結果を合わせ、表3に示す。

表3 「社会貢献」活動への参加の有無

	事前	当日	事後
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
参加あり	15(35.7)	18(45.0)	14(63.6)
参加なし	27(64.3)	22(55.0)	8(36.4)
合計	42(100.0)	40(100.0)	22(100.0)

「ある」と答えた学生が15名(35.7%)、「ない」と答えた学生が27名(64.3%)であった。岸本他(2020)では、学生の「社会貢献」についての回答を分析し、「人のため」「交流」「社会の役に立つ」「お

互いのため」「ボランティア」「助ける」という2つのカテゴリーに集約した²⁶⁾。これらに該当する活動に、3割強の学生が参加していたことが推察される。

e. 「笑話浪漫サロン」と「社会貢献」

「笑話浪漫サロン」は地域貢献につながるか尋ねた。当日・事後アンケートの結果を合わせ、表4に示す。

表4 「笑話浪漫サロン」は「社会貢献」につながるか

	事前	当日	事後
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
とてもそう思う	16(37.2)	17(40.5)	12(54.5)
まあまあそう思う	25(58.1)	22(52.4)	9(40.9)
どちらとも言えない	2(4.7)	3(7.1)	1(4.5)
あまりそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
全く思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
合計	43(100.0)	42(100.0)	22(100.0)

事前アンケートでは、9割以上の学生が、「笑話浪漫サロン」は本学の建学の精神の1つである「社会貢献」につながると考えていることがわかった。

f. 「責任感尺度」の結果

谷田(松崎)(2015)の「大学生の地域社会への責任感尺度」²⁷⁾から抜粋した「責任感尺度」について、第1回と第2回の事前・当日・事後アンケートの結果を表5に示す。

表5 「責任感尺度」の平均値

項目	第1回			第2回		
	事前	当日	事後	事前	当日	事後
地域社会の一員として、何か地域社会のために貢献したい	2.12	2.43	1.64	1.92	1.84	1.54
地域の中の問題を解決するために、何かができる	2.47	1.95	2.18	2.56	2.24	1.77
地域でのボランティア活動など社会的活動に参加したい	2.12	2.40	1.82	2.00	1.96	1.46
地域社会のために役割を分担し、果たすことができる	2.63	2.00	2.23	2.56	2.04	1.92
地域での住み心地をよくするためにみんなと一緒に活動しようとする気持ちがある	2.09	2.48	1.77	2.2	2.08	1.54
地域のために何かする力が自分にはあると思う	2.91	2.19	2.55	2.84	2.68	2.15
住みよい地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい	2.42	2.45	2	2.56	2.20	1.85
自分が地域社会のために何ができるか、考えられる	2.70	2.05	2.36	2.76	2.40	2.23
地域生活改善のために進んで何かをお手伝いしたい	2.33	2.07	1.95	2.28	2.00	1.62
地域社会の問題に取り組むことに興味・関心がある	2.40	2.40	1.91	2.08	2.12	1.77
地域の生活を改善する責任を、進んで引き受けたい	2.81	2.61	2.45	2.76	2.52	2.00

得点の低い方が強く思っていることを示すことから、事前アンケートが最も低い数値となっている項目はみられなかった。一方で、事前アンケートの数値が最も高い項目は11項目中7項目あった。このことから、「笑話浪漫サロン」の参加により社会への責任感が強まっていく傾向が推察される。今後詳細な分析が必要である。

(2) 当日アンケートと事後アンケート

当日アンケートと事後アンケートの内容は同じであるため、両方の結果を比較しながら考察する。

①分析対象

当日アンケート：「笑話浪漫サロン」当日の参加者43名のうち、質問紙調査に回答した42名（実行委員17名：40.5%、当日ボランティア25名：59.5%）。

事後アンケート：「笑話浪漫サロン」後の学生実行委員会に参加し、質問紙調査に回答した22名（実行委員14名：63.7%、当日ボランティア8名：36.4%）

②「笑話浪漫サロン」に対する思いや考え

a. 参加の感想

「笑話浪漫サロン」に参加した感想を表6に示す。

表6 「笑話浪漫サロン」に参加しての感想

	当日	事後
	人数(%)	人数(%)
とても楽しかった	16(38.1)	7(31.8)
まあまあ楽しかった	22(52.4)	12(54.5)
どちらとも言えない	3(7.1)	3(13.6)
あまり楽しくなかった	1(2.4)	0(0.0)
全く楽しくなかった	0(0.0)	0(0.0)
合計	42(100.0)	22(100.0)

当日と事後の結果を比較すると、「楽しかった」程度について、回答者の割合はほぼ似た数値を示した。事後は約1週間後に回答しているが、楽しかったという思いの変化は時間経過による影響があまりないことがうかがえる。

③社会貢献について

a. 「社会貢献」活動への参加

表3から、「事前」と比べて「当日」「事後」と「社会貢献」活動に参加したと回答した学生の割合が増えていることがわかる。「笑話浪漫サロン」に参加した影響がうかがえる。

b. 「笑話浪漫サロン」と「社会貢献」

表4を見ると、「とてもそう思う」と「まあまあそう思う」の割合の合計は事前・当日・事後ともに95%近くを占め、大きな差はみられない。しかし、当日と事後は「とてもそう思う」の割合が最も多くなっている。また、「とてもそう思う」の割合は事後の方が14%高くなっている。「笑話浪漫サロン」を実際に経験し、その後振り返りを行うことで、「笑話浪漫サロン」が「社会貢献」につながるという思いが強まったことが推察される。

④参加しての感想

第1回と第2回の当日・事後アンケート結果を表7に示す。

表7 「感想」の平均値

	第1回		第2回		
	当日	事後	当日	事後	
高齢者を身近に感じられるようになった	1.93	1.82	1.75	1.54	
子どもが身近に感じられるようになった	2.45	2.32	1.58	1.62	
子どもの保護者が身近に感じられるようになった	2.55	2.27	3.09	1.77	**
教職員が身近に感じられるようになった	2.21	1.91	2.25	1.77	
学生同士の距離感が近くなった	2.07	2.00	1.88	1.54	
色々な人との接し方やコミュニケーション力が高まった	2.14	2.36	1.95	1.54	
子どもと高齢者の間に入ってつなぐことができた	2.74	2.68	2.33	1.92	
高齢者とお互いに理解し合えると思えるようになった	2.48	2.36	2.42	1.92	
高齢者を尊敬する気持ちが強くなった	2.14	2.14	1.88	1.69	
子どもの成長にとって世代間交流の意義を実感した	2.32	2.14	1.79	1.38	
文化や価値の世代間継承の大切さを感じた	2.29	2.14	1.88	1.69	
自分が社会の一員として役立っていると実感した	2.43	2.68	2.13	1.92	
ボランティア活動への参加意欲が増した	2.26	2.18	2.08	1.46	*
人々や地域社会についての視野が広がった	2.21	2.09	2.00	1.46	*
保育現場での世代間交流について関心が増した	2.26	2.27	2.00	1.54	
将来、自ら世代間交流の場づくりを進めたいと思った	2.48	2.64	3.04	1.69	
達成感があった	2.10	1.82	2.04	1.46	
自分の人間関係が広がった	2.17	2.41	2.25	1.62	*
自分のイベント企画力や運営力が高まった	2.71	2.64	2.46	1.92	
実習の時、職に就いた時の参考になる部分があった	2.24	2.32	2.04	1.77	
保育・教育活動において地域との連携の大切さを実感した	2.07	1.95	1.88	1.46	
自分の住んでいる地域についてもっと知りたいと思った	2.31	1.95	2.17	1.54	*

** <.01 * <.05

「感想」の22項目について、第1回「笑話浪漫サロン」の当日と事後を比較したところ、有意な差がみられなかった。

2. 第2回

(1) 事前アンケート

①分析対象

「笑話浪漫サロン」当日の数日前に実施された実行委員会に参加した25名(表2)。そのうち、実行委員16名(64.0%)、当日ボランティア9名(36.0%)

②「笑話浪漫サロン」に対する思いや考え

a. 参加のきっかけ

「以前から参加していたから」がきっかけで参加した学生が最も多かった(12名:57.1%)。その後、「友達や先輩に誘われたから」(7名:33.3%)、「世代間交流に興味があったから」(1名:4.8%)、「ボランティア活動に参加したかったから」(1名:4.8%)と続く。「教職員に勧められたから」はなかった。

「以前から参加していたから」が最も多かったことについては、第2回は当日ボランティアが少なく、学生実行委員が約3分の2を占めた影響が推察される。

b. 参加への気持ち

事前に「笑話浪漫サロン」に対する気持ちを探ったところ、「とても楽しみ」(6名、24.0%)、「まあまあ楽しみ」(14名、56.0%)、「どちらとも言えない」(5名、20.0%)という結果であった。約8割の学生が「とても楽しみ」「まあまあ楽しみ」にしており、第1回より割合が増えていた。

③社会貢献・ボランティアについて

a. 大学入学後のボランティア活動への参加

大学入学後のボランティア活動経験が「ある」学生は23名(92.0%)、「ない」学生は2名(8.0%)であった。この結果も、第2回の分析対象者の3分の2を学生実行委員が占めている影響が推察される。

b. 地域の活動や交流への関心

町内会活動など地域の活動や交流についての関心を探った結果、関心が「ある」学生は18名(72.0%)、「どちらでもない」が6名(24.0%)、「ない」学生は1名(4.0%)という結果であった。地域との交流に関心をもつ学生が7割以上を占めることがわかった。

c. 地域の活動や交流への参加経験

実際に地域の活動や交流に参加した経験については、「ある」学生が13名(52.0%)、「ない」学生が12名(48.0%)であった。経験した学生が5割以上を占めるが、第2回の結果にも継続参加している実行委員の影響が推察される。

d. 「社会貢献」活動への参加

「社会貢献」のための活動経験の有無を尋ねた。結果を表8に示す。

表8 「社会貢献」活動への参加の有無

	事前	当日	事後
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
参加あり	9(39.1)	15(65.2)	10(83.3)
参加なし	14(60.9)	8(34.8)	2(16.7)
合計	23(100.0)	23(100.0)	12(100.0)

「ある」と答えた学生が9名(39.1%)、「ない」と答えた学生が14名(60.9%)という結果であり、第1回とほぼ同じ割合であった。

e. 「笑話浪漫サロン」と「社会貢献」

結果を表9に示す。

表9「笑話浪漫サロン」は「社会貢献」につながるか

	事前	当日	事後
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
とてもそう思う	17(68.0)	14(56.0)	9(69.2)
まあまあそう思う	8(32.0)	10(40.0)	4(30.8)
どちらとも言えない	0(0.0)	1(4.0)	0(0.0)
あまりそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
全く思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
合計	25(100.0)	25(100.0)	13(100.0)

「とてもそう思う」17名(68.0%)、「まあまあそう思う」8名(32.0%)という結果であった。第1回と比較すると、「社会貢献」につながると考えている学生の割合が増え、9割以上となっている。

f. 「責任感尺度」の結果

事前アンケートの数値が最も高い項目は、11項目中10項目あった(表5)。第2回の結果からも、「笑話浪漫サロン」の参加により社会への責任感が強くなる傾向がうかがえる。

(2) 当日アンケートと事後アンケート

①分析対象

当日アンケート：「笑話浪漫サロン」当日に参加し、質問紙調査に回答した25名(実行委員11名:44.0%、当日ボランティア25名:56.0%)

事後アンケート：「笑話浪漫サロン」当日の数日後に行われた学生実行委員会に参加し、質問紙調査に回答した13名。全員学生実行委員であった。

②「笑話浪漫サロン」に対する思いや考え

a. 参加の感想

「笑話浪漫サロン」に参加した感想について、結果を表10に示す。

表10 「笑話浪漫サロン」に参加しての感想

	当日	事後
	人数(%)	人数(%)
とても楽しかった	9(36.0)	6(54.5)
まあまあ楽しかった	12(48.0)	1(9.1)
どちらとも言えない	4(16.0)	4(36.4)
あまり楽しくなかった	0(0.0)	0(0.0)
全く楽しくなかった	0(0.0)	0(0.0)
合計	25(100.0)	11(100.0)

当日と事後の結果を比較すると、「楽しかった」と答えた割合は、事後アンケートの方が低かった。事後アンケートは、学生実行委員のみの回答であったことが、影響を与えているのではなからうか。

③社会貢献について

a. 「社会貢献」活動への参加

表8から、「事前」と比べて「当日」「事後」と「社会貢献」活動に参加したと回答した学生の割合が増えていることがわかる。第1回と同様に、「笑話浪漫サロン」に参加した影響が推察される。

b. 「笑話浪漫サロン」と「社会貢献」

表9から、事前と事後アンケートでは、「とてもそう思う」と「まあまあそう思う」の割合は似た数値を示しているが、当日アンケート結果は、「とてもそう思う」が事前・事後アンケートより約10%低い結果となっている。

④参加しての感想(表7)

第2回「笑話浪漫サロン」の当日と事後の結果を

比較したところ、「子どもの保護者が身近に感じられるようになった」($t=3.01, p<.01$)、「ボランティア活動への参加意欲が増した」($t=2.22, p<.05$)「人々や地域社会についての視野が広がった」($t=2.37, p<.05$)「自分の人間関係が広がった」($t=2.15, p<.05$)「自分の住んでいる地域についてもっと知りたいと思った」($t=2.65, p<.05$)の5項目すべて事後の結果が有意に低くかった。本研究では、質問項目は5件法による回答であり、数値が低いほど強く思っていることを示す。そのため、22項目中21項目で事後の方が平均値が低かったことから、振り返りを行ったことで意識が高まった可能性が推察される。

IV. まとめ

本研究では、本学の学生が主体となって行った世代間交流活動を振り返り、教師や保育者を目指す大学生が地域の高齢者と子どもを対象とした世代間交流活動に参加することで得る学びや気づきに焦点を当て、活動の参加の前後においてどのような認識の変化がみられるのかを検証した。その結果、活動の時間経過に関わらず、世代間交流活動(以下、笑話浪漫サロン)に参加することにより、社会貢献に関する責任感を強く意識する傾向が見られた。また、全体を通して6割以上の学生が笑話浪漫サロンへの参加を「とても楽しかった」「まあまあ楽しかった」とポジティブに捉えていることが示された。

活動参加の前後における認識の変化については、社会貢献に関する責任感は当日と比較して事後が高い傾向が示された。更に、活動に参加した感想の中で、「保護者を身近に感じる」「ボランティア活動への参加意欲」「地域社会への視野や人間関係の広がり」について、意識が強まることが有意に示された。

これらの結果から、笑話浪漫サロンへの参加は、学生の社会貢献に関する責任感を強め、事後の振り返りにより具体的な自己意識の変容につながる事が推測された。

今後検討すべき課題として、一般化可能性の問題がある。本調査のデータを縦断的に分析するには、被調査者の人数、属性の違いを考慮した調査計画及び検討が必要といえよう。

注

(1) 今年度発表の合計特殊出生率は1.36と4年連続で低下し、高齢化率は28.6%と過去最高値を更新した(2020/6/6付日本経済新聞 朝刊)。

付記

本論は、Iを権、IIを水野、IIIを岸本と石川、IVを小原が執筆した。

引用文献

- 1) 尾崎司 (2017) 「保育における「高齢者とのかわり～世代間交流概念から領域『人間関係』をとらえ直す」『教員養成教育推進室年報』第4号、pp.57-63
- 2) 藤原佳典 (2013) 「第二章 世代間交流活動の意義」倉岡正高編著、『地域を元気にする世代間交流』、遊行社、pp.28-35
- 3) 金森由華 (2012) 「高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に—」『愛知淑徳大学論集・福祉貢献学部編』2号、pp.69-77
- 4) 権 法珠・岸本美紀・仲田勝美・小野 隆 (2018) 「地域での世代間交流活動の参加経験が保育士を目指す大学生の認識に及ぼす影響～本学学生による『笑話浪漫サロン』の実践を通して～」『地域協働研究』第4号、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働推進センター、pp.39-48
- 5) 田淵恵・三浦麻子 (2014) 「高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討」『心理学研究』84、pp.632-638
- 6) 黒岩亮子 (2018) 「日本における世代間交流の展開」『社会福祉』第59号、pp.85-95
- 7) 崔恩熙 (2019) 「理論をふまえた高齢者と子ども・若者の交流に関する研究の到達点」『福祉社会開発研究』第14号、日本福祉大学大学院、pp.1-11
- 8) 厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針』フレーベル館、p.6
- 9) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』フレーベル館、p.12
- 10) 内閣府 (2017) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館、p.28
- 11) 徳田多佳子・請川滋大 (2020) 「保育における幼児と高齢者の世代間交流」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第26号、

pp.149-157

- 12) 實川慎子・高木夏奈子・栗原ひとみ・山田千愛・高野良子 (2019) 「保育現場の地域連携事業—千葉市内の保育所等の実態調査から—」『植草学園大学研究紀要』第11巻、pp.41-51
- 13) 吉津晶子・溝邊和成 (2017) 「調査研究シリーズ 118 世代間交流の教育的意義に関する研究の動向と課題」『海外事情研究』44号、pp.109-127
- 14) 矢野真・田爪宏二・吉津晶子 (2016) 「保育者養成におけるコミュニケーションをテーマとした造形活動—造形活動による幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第12号、pp.155-162
- 15) 加藤美穂・三浦英雄・加藤恵子 (2015) 「ふれあい給食が世代間交流として地域高齢者および短大生に与える効果」『名古屋文理大学紀要』第16号、pp.19-26
- 16) 芝田郁子 (2019) 「教職実践演習にみられる短期大学保育科学生の学びと変容—幼老統合ケアの実践活動を通して—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第41号、pp.117-134
- 17) 一原由美子・波止千穂・梅崎節子・山田美幸 (2018) 「地域の高齢者と大学生による異世代間交流」『純真学園大学雑誌』第7号、pp.9-13
- 18) 伊多波美奈・首藤敏元 (2016) 「大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感及び協調性との関連」『埼玉大学紀要』65(2)、pp.35-46
- 19) 荒井俊行・野嶋栄一郎 (2017) 「大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』41(1)、pp.97-108
- 20) 溝部ちづ・石井眞治・斉藤正信・財津伸子・道法 亜梨沙・酒井研作・杉田郁代 (2014) 「教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の教育効果に関する研究(2)」『比治山大学紀要』第21号、pp.31-43
- 21) 谷田(松崎) 勇人 (2015) 「大学生の地域社会への責任感尺度の作成」『日本教育工学会論文誌』39(1)、pp.31-40
- 22) 前掲4)
- 23) 前掲21)
- 24) 羅明振・荒木勝・栗原孝次 (2012) 「大学生の社

会貢献・地域連携に対する意識」『岡山大学環境理工学部研究報告』第17巻1号、pp.7-21

- 25) マイナビ 学生の窓口 「意外な結果に?! 正直『近所付き合い』をしたことない大学生は約4割も」
(<https://gakumado.mynavi.jp/gmd/articles/45294>)
(2020/11/22)
- 26) 岸本美紀・権 洵珠・小野 隆・水野恭子・宮腰宏美・矢藤誠慈郎 (2020) 「地域における世代間交流活動への参加が教師・保育者を目指す学生の認識に及ぼす影響—社会貢献の観点に着目して—」『日本保育者養成教育学会第4回プログラム・抄録集』、p.76
- 27) 前掲 21)

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様、「笑話浪漫サロン」に関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。